

日本医師会ジュニアドクターズネットワーク(JMA-JDN)

企画実施報告書

企画名: フォトボイス^{注1}～写真は語る、写真で語る、写真を語る～

担当役員: 阿部計大(ハーバード大学 T.H.Chan 公衆衛生大学院武見国際保健プログラム/東京大学大学院 医学系研究科 公衆衛生学)

共同企画:

- ・国際医学生連盟 日本
(International Federation of Medical Students' Associations Japan; IFMSA-Japan)
- ・アジア医学生連絡協議会日本支部
(Asian Medical Students' Association Japan; AMSA Japan)
- ・国際保健医療学会学生部会
(Japan Association for International Health Students Section; jaih-s)

開催経緯:

2017年度より JMA-JDN のメンバーは、国際医学生連盟 日本(IFMSA-Japan)、アジア医学生連絡協議会日本支部(AMSA Japan)、日本国際保健医療学会学生部会(jaih-s)の医学生3団体の役員メンバーと交流を重ねて参りました。国際保健に興味を持つ若手医師と学生が毎月オンライン会議で情報交換し、議論することで、学生が医師になってからも JMA-JDN やその他で国際保健活動に関わり続けることを支援してきました。また、例年開催させて頂いている JMA-JDN 総会では、上記医学生3団体と共にイベントを催し、直接対話の機会を設けてきました。昨年度は、国際保健検討委員会の委員の先生にご講演を賜り、多くの若手医師と医学生が感銘を受けました。しかし、2020年度は COVID-19 による未曾有の事態にあり JMA-JDN 総会の開催の目途は立っていません。そこで、医学生らと相談し、オンラインでのイベント共同開催を企画致しました。

今期の医学生メンバーは、自らが国際保健活動で経験した地域や社会の問題を共有し、その解決策を共に考えたいと思っていました。また、それらの社会課題に対して、どのように情報発信をしていくのが良いのかを知りたいと望んでいました。このような問題意識は、COVID-19 における報道の在り方やインターネット上での情報の錯綜について考える契機にもなるだろうと予想されました。

そこで、下記を目的に、医学生らと共に3つのオンラインイベントを企画し、実施致

しました。

目的:

1. 国際保健活動や公衆衛生活動において感じた地域や社会の課題を共有し、解決策を考えること。
2. 明らかになった社会課題について、情報発信の仕方を学ぶこと。

実施報告:

1. フォトボイス^{注1}

日時:2020年7月25日

場所:Zoom

参加人数:16人

報告者:IFMSA-Japan 代表 久世瑞穂

実施内容:

当日はグループに分かれて前半2枚、後半2枚、計4枚の写真について意見を交換しました。私はグループの進行役を前後半通じてつとめました。

前半は冬の旭川の写真と地震の爪痕が残る熊本城の写真を取り上げました。様々な地域からの参加者の方がいたため、雪深い写真への感じ方が様々で国内の気候、文化の違いを体感することができました。熊本城の写真では美しい桜と崩れた石垣の対比が焦点となりました。桜がなぜ儂さを感じさせるのか、という部分まで意見を交換できたのが非常に興味深かったです。

後半は大学の掲示板の写真と熊本の慈恵病院にある通称赤ちゃんポストの写真を取り上げました。掲示板の写真は COVID-19 の影響を意識して撮影されましたが、現在のデジタル化の社会を想像することもできる、という意見が斬新な視点で面白かったです。また、慈恵病院の写真に対してはプライバシーへの配慮がなされているのか、どの程度利用されているのか、預けられた子供の将来についてなど、様々な疑問が挙げられていました。

写真は目の前の風景をあるがままに切り取ったもののはずなのに、一枚の写真についても全く同じ視点は存在せず、どんどんと想像が膨らむ過程を楽しむことができました。また、一枚一枚の写真の背景に、様々な背景を持つ参加者の方と思いを馳せる時間は非常に貴重な機会でした。今後もこのように多様な視点を体感できるイベントを企画できればと思っております。

アンケート結果:回答数は12でした。イベントの満足評価は5段階中5点をつけた方が8割を超えました。難易度は3以下の点数をつけた方が合計すると8割になり次回も参加したか、という項目でも5段階中4をつけてくださった方が二人、5点をつけてくださった方が10人いらっしゃいました。自由記述の欄では写真について話すという経験

が新鮮で楽しかった、一つの写真に対しても様々な見方があった、社会課題に対してじっくり話すことができた、などの意見をいただきました。

アンケートの結果より、社会課題に対する多様な意見を写真を通して感じる、というイベントの狙いは達成されたと考えます。イベントの満足度も非常に高く今後のイベントの参考となる企画となりました。

2. オンライン写真展

日時:2020年7月26日から31日

場所:Facebook group

参加人数:109人

報告者:AMSA Japan 代表 宮井秀彬

実施内容:

Facebook ページを立ち上げ、皆様から集めた写真を公開しコメントを集めるという形式で、皆様の写真に対する見方の違いを楽しもうという企画でした。写真は計5枚で、韓国での日本大使館前で行われたデモの写真からインドネシアのお寿司屋、奈良公園でのシカの写真など幅広く取り扱われました。

その中で一番コメントの多かった写真は韓国から見える北朝鮮との境界線の川の写真でした。一見見るとただの川と、奥に少し町が見えるだけで二国の境界線と判断するには何も手掛かりがありません。しかし、だからこそ新しい見方ができます。コメント欄には「向こう岸の山の麓にあるのはお城なのでは?」「日本の川には堤防があるイメージだがここにはない。水害の心配はないのだろうか」「手前の木が一方向に流れているような生え方をしているので風が強い地域なのだろう。倒れている木もあるし地盤が緩いのかも」「すぐ近くに道路もあるし対策がされているのか心配」などの意見が集まりました。

最初からタイトルが示されていれば、きっと韓国と北朝鮮の関係性について思いを寄せる人が多かったと思います。その中で、今回は皆さんがその地形や建物により注目していたのはすごく面白い結果ではないでしょうか。与えられる情報によって着目点が変わったと言えます。

ただ、写真展をするにあたって一般の方からなかなかコメントを頂けなかったのは反省点でもあります。イベントページには多くの方が入っていただけだったので、そこからイベント自体により関心を引き寄せる工夫が不十分だったのかも知れません。スタッフからは、コメントが入るたびに通知が来るような設定にする、事前に一つサンプルを流して分かりやすくする、コメントを直接お願いするなど積極的にアクションするといった改善策が挙げられました。

3. オンライン講演会

日時:2020年 8月1日

場所:Zoom

参加人数:54人(参加申し込み)42人(当日参加)

報告者:jaih-s 森田智子

実施内容:

・中村安秀様ご講演(30分)

「支援する・支援される～フィールドワーカーとしてのつぶやき～」

インドネシアやアフガニスタンなどの国際保健の現場で長年働かれており、母子健康手帳を世界に広めた立役者である中村安秀先生にご講演いただきました。

インドネシアでのフィールドワークの写真からは、村のヘルスボランティアは、村の健康は自分たちで守るという意志をもって働いていることや、障害のある子どもを地域全体で支え、成長を見守っている様子を語っていただきました。また、アフガニスタンの難民キャンプで理学療法士をしている元難民の青年の写真からは、難民同士がエンパワメントし合う様子をお話いただきました。中村先生が行ったインドネシアで母子手帳のプロジェクトの当時の写真もお見せいただきました。反対する人も多い中行ったところ、実際には隣町からも人が集まり母子手帳が足らなくなる程であったそうです。主役はあくまで当事者であり、自分たちは国際協力をさせていたでいる身であること、プロジェクトの成功には当事者に受け入れられることが大事であることを教えてくださいました。

長年フィールドワークをされてきた中村先生の、国際協力をする土地や人々へのリスクを感じるご講演でした。国際保健に対する姿勢や向き合い方をお話していただき、国際協力や国際保健を志す学生には学ぶことの多いご講演でした。

・安田菜津紀様^{註2}ご講演(30分)

「写真で伝える仕事」

東南アジア、中東、アフリカ、日本国内の難民や貧困、災害の取材を行っているフォトジャーナリストである安田菜津紀さんにご講演いただきました。

東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県の陸前高田市の一本松の写真の写真からは、一枚の写真が人により感じ方が違うことを心に留め、誰のための写真であるのかを考えることの大切さをお話いただきました。写真は今起きていることを伝えるものというだけでなく、今は会えない人に出会うことができる窓であり、未来に手紙をつづるような役割も果たしてくれるということを語っていただきました。

また、シリアでのご経験からは、フォトジャーナリストとして写真を撮り続けることの意味と役割をお話いただきました。シリアで人々を苦しめているものは、戦争それ自身ではなく、これだけのことが起きているのに世界は自分たちに無関心であるということ。

その中でフォトジャーナリストとしての役割は、現地に行って人々と会うことでそこにいる人々のことを忘れていないというメッセージを発すること、そしてそれを日本に持ち帰り世界で今起きていることを発信し、関心の輪を広げていくことである、と語ってくださいました。

安田さんのご経験と現地の様子を自然に捉えた素敵な写真を拝見し、一つの写真に込められた想いとその背景にある人々の生活に想いをはせることの重要性を感じました。写真の魅力と影響力を再認識し、新たな視点で写真を見つめ直す良い機会となりました。

アンケート結果: 回答: 25/42 人 回収率: 60%

➤ 所属団体: AMSA Japan 8% (2 人)、IFMSA-Japan 24% (6 人)、jaih-s 16% (4 人)、JMA-JDN 16% (4 人)、その他 56% (14 人)

1. あなたの所属団体を教えてください。

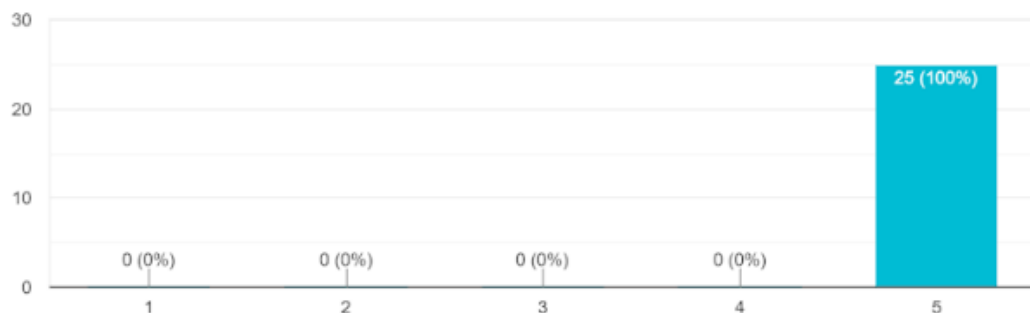
25 responses



➤ イベント評価 5 (100%)

2. 今回のイベントの評価を教えてください。

25 responses



理由 (抜粋)

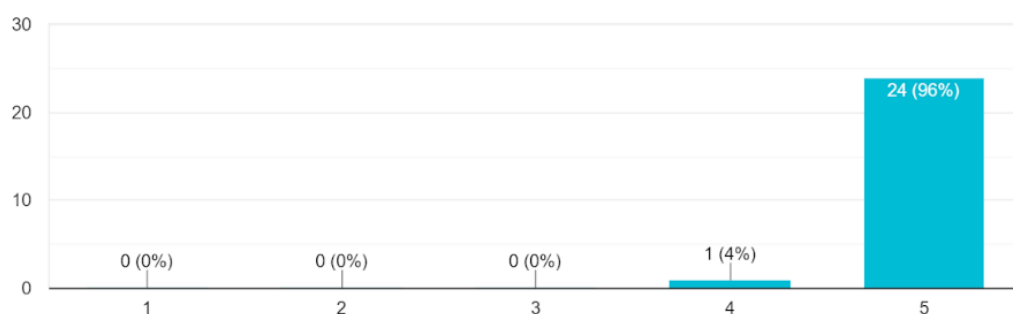
・写真という一つのキーワードを通して国際保健から日本の災害まで、とても幅広いお話を聞いた。

- ・写真自体だけでなく、国際的問題に関しても多くのことを知ることができた。
- ・1つ1つのストーリーがすごく伝わってきて、写真とともに、いつもの講演会以上に心の記憶に残った。

➤ 中村安秀様のご講演:評価5 (96%)

4. 中村安秀様のご講演について評価を教えてください。

25 responses



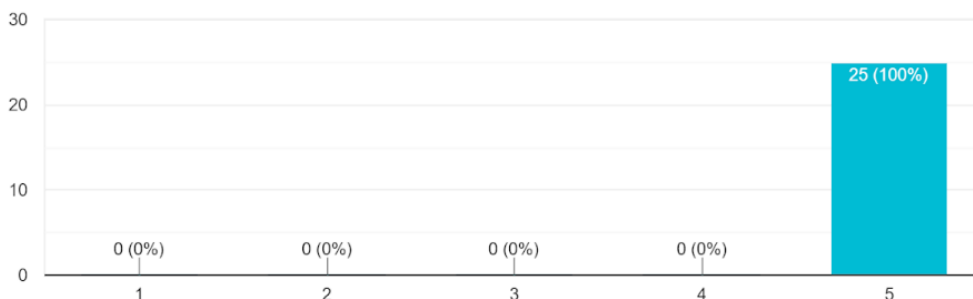
理由 (抜粋)

- ・写真から伝わってくるものが大きかったので、想像したり臨場感を持って国際保健を学ぶことができた。
- ・国際協力をさせていただく、という考えを言葉だけではなく覚悟を持つ大切さを伝えていただいた。
- ・30 数年間のフィールドワークならびに日本での活動の一端を雄弁に語る写真に感銘を受けた。

➤ 安田菜津紀様のご講演:評価5 (100%)

6. 安田菜津紀様のご講演について評価を教えてください。

25 responses



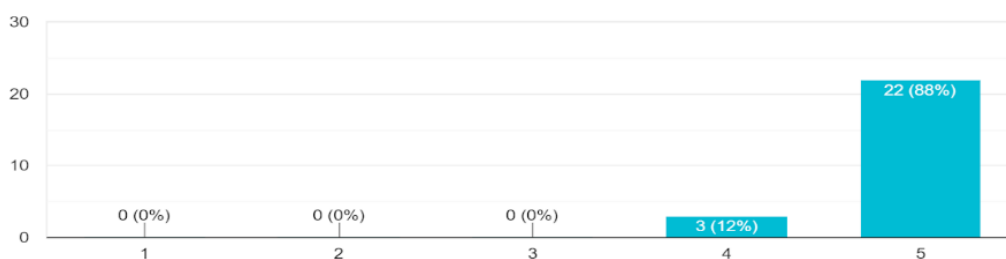
理由(抜粋)

- ・現地の様子を自然にとらえた写真と、その中へ上手く引き込んでいく安田さんの語りで、一枚一枚の写真が印象に残った。写真の魅力や影響力を再認識させていただく、素敵な機会となったと思う。
- ・一枚の写真でもそれを見る人によって受け取られ方が変わるということに衝撃を受けた。その写真を見るすべての人がどう捉えるのかを考えながら撮り、発信することの大切さを学ぶことができた。

➤ 次回も参加したい: 評価5 (88%)

8. 次回も参加したいですか？

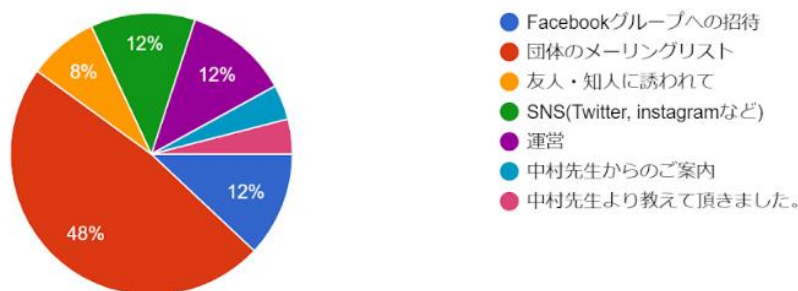
25 responses



- ### ➤ イベントを何で知ったか: 団体 ML48%、Facebook グループへの招待 12%、SNS (Twitter、Instagram など) 12%、友人知人に誘われて 12%、中村先生のご紹介 8%

9. このイベントをどこで知りましたか

25 responses



➤ 今後コラボ企画で取り上げてほしいテーマ

- ・国際保健のキャリア形成
- ・在日外国人の方への医療
- ・国際協力、国際保健で活躍される様々な分野の方のご講演

- ・国際保健における多職種連携
- ・各団体でつながりのある現地で長年活動された方々を招いたイベント

➤ 参加者の感想(抜粋)

- ・総じてとても勉強になり、参加できて本当によかった。
- ・感動した。
- ・医療系の学生が国際的に活動できる団体がこんなに沢山あることを知らなかった。

➤ 次回への改善点

- ・質問時間が短いように感じた。
- ・Staff 以外の方の質問が比較的少ないかなと思った。盛り上げる工夫が必要かと思った。
- ・夕方以降に開催頂けるとありがたい。
- ・中村先生と安田さんとのディスカッションをもう少し聞きたかった。

➤ 集合写真(ビデオオンの参加者のみ)



アウトプット:

医学生と共に学んだことをドクターゼに寄稿致しました。また、世界医師会 JDN Newsletter 等での報告を検討しています。

謝辞:

講師の招聘をご支援下さいました日本医師会、ご講演をご快諾頂きました中村安秀様、安田菜津紀様に心より感謝申し上げます。

注 1: フォトボイス

フォトボイスは参加型アクション・リサーチの手法として Caroline Wang, DrPH (当時ミシガン大学の公衆衛生学の教授) が開発しました。参加メンバーが撮影した写真を持ち寄ってグループで話し合い、自分の経験や心情をもとに伝えたいメッセージ(「声」)を作ります。写真と声を展示したり、インターネット上で発信したり、スライドショーやビデオを作ったりなど、さまざまな媒体を通して、参加メンバーは自分の経験や気持ちを伝えたり、地域や社会の課題や問題を指摘します。

注 2: 安田菜津紀様

これまで国際保健医療学会においてご講演頂いた経緯があり、多くの学生が内容に感銘を受けました。今回も国際保健医療学会学生部会の担当学生よりご講演の依頼をさせて頂き、ご快諾頂きました。 Web site: <http://yasudanatsuki.com/>